

氏名	富安 由真
ヨミガナ	トミヤス ユマ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第528号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 心霊表象論—心霊イメージの変遷から読み解く「不気味な」表現の可能性— 〈作品〉 Room of Absence 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	齋藤芽生
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	杉戸 洋
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文に於ける目的は、「心霊」を扱った芸術表現の可能性を探ることにある。具体的には、ポルターガイストや心霊写真などの心霊現象として認識されている事例や、美術・演劇・文芸・映画など芸術一般に於ける様々な心霊の表現を、その時代の文化的・思想的背景との関連性から分析し、現代に於ける新しい心霊表現の可能性を模索することが目的となる。

「心霊」は、しばしばオカルトというジャンルの中で語られ、それは肯定的であれ否定的であれ、非論理的・非科学的で夢想的な事柄として捉えられがちである。それは近代以降の歴史の中で特に顕著であり、「心霊」が学問として研究の対象となることは殆ど無かったと言える。しかし一方で、心霊は古代より人の身近な存在であった。何故ならば、心霊は人の生死と深く結びつくものだからである。多くの原始的な宗教や土着的な信仰と心霊は切り離せず、また多くの物語や芸術作品の中で心霊は語られてきた。

しかし近代以降に心霊が学問対象として嫌われてきたのと同時に、芸術、ことに美術に於いて、心霊は敬遠されてきたと言える。それは美術が西洋の文脈に於いてまた「学問」であるからだ。（しかし一方で、「ハイ・アート」では無い表現領域、即ち映画や小説、漫画などの大衆娯楽に於いては好まれてきたという事実は興味深い。）

私が本論文に於いて、心霊を扱った芸術表現の可能性を探ることを目的とするのには、心霊表現が芸術分野に於いてもっと扱われて良いという思いがあるからである。心霊を見つめるという行為は、全ての人間にすべからず訪れる「死」を見つめる行為であるとも言える。また、不可解で曖昧である存在を扱うことは、芸術に於いて非常に意義深く、自己を見つめる上で有用なアプローチとなると信じている。この論文に於いては、心霊という概念が我々の生活の中でどのような関わり方をしてきたか、文化面や思想面から考察していきたい。その結果として、心霊を我々が自己を見つめる上での一つの有効なアプローチと成り得ることを提示し、それを芸術表現に取り入れる価値を模索したい。

## 各章の構成

第1章ではジークムント・フロイトの提唱した「不気味なもの」の概念と心霊表現の関係性を考察し、能や19世紀の心霊絵画、また現代に於ける心霊表現の再評価の気運などを、具体例をもって分析・考察する。第2章ではホラー映画作品等の脚本を数多く手掛ける小中千昭が提唱した、ホラー映画作成の方法論である小中理論を軸に、様々なホラー映画に於ける演出的・視覚的ロジックを分析する。特に観客に「怖がってよい映画」だと伝える為の技術的な演出や、ホラー映画に於ける怖さの図像(アイコン)、またジャック・クレイトン監督による映画『回転 (1961年)』などで見られる幽霊像の姿形、ピーター・メダック監督による映画『チェンジリング (1979年)』で見られる幽霊像が登場せずに表現される心霊表現などについて考察する。第3章では日本の幽霊画、19世紀から現代までの心霊写真の変遷、ポルターガイスト現象が心霊現象として認知されるに至った過程の研究から、その時代その地域の文化的・思想的背景がどのように心霊の表象に関わってきたかを分析する。第4章ではそれらを踏まえ、現代に於いてどのような心霊表現がリアリティを持って鑑賞者に訴えられるか、自身の博士審査展出品作品を例にとりながら、「アトモスフィア(雰囲気)の生成」「虚構と現実が入り交じる不気味さ」「気配の創出」という3点をキーに模索する。

## 結論

本論文を通して見えてきたことは、様々な心霊表現と「不気味なもの」で語られたことの一一致である。それらは実生活の中で「その存在が本当はあるのではないか」という疑念を想起させる「リアリティ」や、知的不確かさを備えている。更に、姿を見せる心霊と見せない心霊の表現の違いを見てきたことも重要な考察となった。

始めに述べたように、本論文の目的は、心霊を表象的観点から分析—即ち我々は知覚に於いてどのような現象を心霊と感じるのかを文化的・思想的背景から研究—し、心霊を扱った芸術表現の新しい可能性を模索することだった。その結果として、心霊を我々が自己を見つめる上での一つの有効なアプローチと成り得ることを提示し、それを芸術表現に取り入れる価値を模索する目的があった。

本論文の考察によって分かったことは、心霊に触れる行為は、自分が現実だと信じてきた基盤を揺らがせるものと言うことだ。心霊というものは、虚構と現実の境目に位置する。心霊を考えることは、人が生と死に関わってきた歴史を見る行為でもあるが、同時に自己(内在したイメージ)と外界(客観)の境界を探る行為でもあると言える。心霊を芸術表現に取り入れることは、鑑賞者に自己と外界—虚構と現実—の境目を問い直す経験をさせる。そしてそれは、世界と自分を見つめ直す為の重要なアプローチの一つに成り得ると、私は確信している。

曖昧さに目を向け、自分が現実だと信じてきた基盤が如何に不安定なものであるか鑑賞者に気付かせることは、この物質社会に於いて意義深いことだ。私は今後の作品で、より多くの人にその不安定な基盤に目を向かせ、世界と自分を見つめ直すきっかけを与えていきたい。その為には更なる研究が必要となるだろう。心霊を一つのきっかけとした上で、虚構と現実の境目を見る試みは、今後精神分析学の方面にも研究を広げていけると感じている。

### (論文審査結果の要旨)

「心霊」とは何なのだろうか。それをとりあえず「不在の人間の気配」と定義してみる。つまりそこにいないはずの人間の徴が様々な現象や雰囲気となり可視化されているということである。

心霊は存在するものというより感知するものであり、現実と想像の境界線上に位置し、常に揺らぎ続けている。心霊を感じたり、信じたり、考えたりすることはその揺動を知覚することなのである。それはまた生きている私たちと死んだ人々との関係や、自己の内奥にあるイメージと客観的な外界のイメージの境目を問い直すことでもある。

本論文はそのような観点から芸術の世界における心霊イメージを検証し、人がなぜ心霊を見るのか、心

霊はどのように表現されてきたかを分析し、アートの新たなフィールドを掘り起こそうとする試みである。

論考は、1919年にフロイトが発表した論文「不気味なもの」と心霊表現の関係を核としつつ、ホラー映画の演出法やトリックを明らかにし、日本の能や幽霊画の系譜を辿り、心霊写真の出現やポルターガイスト現象を探り、時代や地域により、どのような思想や文化を背景に心霊が受容されてきたのかを掘り下げ、自作へと繋げてゆく。

心霊を扱った芸術表現は様々にあるが、本論文は特に人間が心霊を感じるメカニズムにフォーカスを絞り、心理学的なアプローチを取り入れたことが説得力を持つに至った大きな要因だろう。心霊はしばしば非科学的で夢想的な事柄と捉えられやすいが、一方で人間の死生観と結びつき、太古の昔から多様に語り継がれてきた。心霊表現を見つめることですべての人々に否応無く訪れる死を想い、自己と世界の境界領域を再考することが創造行為に不可欠であることを筆者は明快な言葉で表明している。以上の理由から本論文は博士号に充分値すると判断した。

#### (作品審査結果の要旨)

富安由真は「死」を背景にこれまで正常なものに潜む狂気、あるいはオカルトと表される異端的な現象や思想、そうした歪みや狂気、不可視な事象を作品表現していく探求をしてきている。

美術館の展示では日常の背景にある歪みや狂気の表現として展示室の中に箱を置き、もう一つ空間を作り、持ち主不明の様々な持ち物を持ち込み、空間だけがスケールダウンされた異常に圧迫感のある誰でもない誰かの部屋という舞台装置。一見単なるお化け屋敷のようであり、しかもギミックを明らさまに見せている。これはホラー映画を鑑賞する前にみるポスターのような導入であり、鑑賞者にフィクションであることを最初の段階で提示している。

しかしその室内の出来事を映像に映し出し、そのモニターを部屋の外に持ってくる事により単なるリアルタイムの映像をフェイクと見せかけながらも、もしかして室内に入ってみていた物とは別の何かが映っているかもと言う心理を鑑賞者にもたらし。室内空間をモニタリングする実証実験装置であると同時に鑑賞者をモニタリングする装置にもなっており本人が求める不気味さの表現を箱とモニターの二重構造の導入により、人間の無意識の中のどこかに潜む、信じる信じない解釈不可能な現実空間以外の世界があるという認識を導きだす人間の心理を操作する作品になっている。

これまでは自然界の鉱物、知らない人の写真や物品などであらゆる表現を試みて来ているが、美術で表現、言語化することでナレーティブな作用で遠のいてしまう問題を、論文にも記している通り今後の精神分析方面へと領域を広げて制作に探求いく事に期待する。

#### (総合審査結果の要旨)

富安由真は博士審査作品として、一つの部屋『Room of Absence』を作った。外部から見れば簡易な小屋状の建造物だが、内部は何者かの生活の息づかいを感じるような内装が施されている。部屋に流れる時間は夜なのだろう。鑑賞者が静寂のなか自身が住人になったように感じ始めるその時、突然どこからか異音がし始める。窓を叩く音、消える照明、突然繋がる遠いラジオ。次々と起こる違和感の連動に鑑賞者は緊張してゆき、この部屋のどこかに居る見えない存在の像を探り始める。これは「ポルターガイスト」を感じさせる様々な機会仕掛けが施された部屋なのだ。

富安は英国留学時から一貫して、心霊現象と呼ばれる領域と美術との関係を研究してきた。「何かが見えてしまう子だった」という幼時の記憶が彼女の表現のそもそもの原点だ。不安と懐かしさ... 一見相反する二つの感覚は実はひとの内部で時に絶妙な相性をもって同居する。「ひとが確固たる現実と信じている基盤を、曖昧にし揺るがせたい」と彼女は文中で述べているが、言葉を変えて言えば、彼女にとって芸術の使命とは「人間存在の複雑さを複雑なまま、呼び起こし、目覚ませること」なのだ。

現れてくれないものや現れつつあるものからひとは本能的に目が離せない。そんな意識の揺れを、作品で実証しようとした。単に現象への不安にひとを引きずりこむような装置だったのではなく、部屋外壁に部屋内の映像を展示し、ひとがホラー的に追いつめられる心理を示してみせるような客観的部分もあった。

かたや論文『心霊表象論-心霊イメージの変遷から読み解く「不気味な」表現の可能性-』では、心霊現象とよばれるものの歴史を参照しながら、フロイトの言うところの「不気味なもの」を繙いた。そしていくつかのホラー映画の手法に具体的に触れながら、ひとの中にある不気味なものへの期待感や意識の流れを検証した。

作品・論文とともに共通して、心霊と芸術という曖昧な問題言及への興味深さ、ポルターガイストの創出というアイデアそのものの面白さ、見えざる気配への意識を主観と客観の両方から見つめる実験性が高く評価されたため、合格とした。